

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520877

研究課題名(和文)中国近世社会像の再構築に向けた宋～清の地方志及び碑文に関する記録伝承の地域史研究

研究課題名(英文)A Study about Regional History of Lore Recorded from Song to Qing Local Gazetteers and Inscriptions for the Reconstruction Society Image of Early Modern China

研究代表者

須江 隆(SUE, Takashi)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：90297797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、海外の研究者からは理解し難い現状にある、独自の展開をしてきた日本の中国近世地域史研究の実態と特徴を明らかにし、当該研究の今後の可能性を模索するための問題提起をすることを目的とした。また、中国近世地域史研究が具有してきた“足枷”をはずしていくための方法を探るために、地方志や石刻の史料性を検討し、今後の当該研究の可能性を模索した。この研究を通して、中国近世における「地域」像に関する、国際的視野からの議論をするための幾つかの有効な問題提起ができれば幸いである。

研究成果の概要(英文)：Studies of China early modern regional history developed in Japan in ways that are not easy for scholars abroad to understand. In this study, I will cast light on the actual conditions and characteristics of the studies of China early modern regional history in Japan, and ask some questions that help explore the future potential of this field. In this study, I hope to cast light on the conditions and characteristics of China early modern regional studies in Japan, and on the unique way in which these studies have developed.

And, in order to explore ways of removing the “obstacles” that have haunted the study of China early modern regional history in Japan, I looked into the potential for further research on China early modern history, by examining the value of local gazetteers and inscriptions as historical materials. I hope to point out a few themes from global perspective that can effectively facilitate discussion of the images of “regional” society in early modern China.

研究分野：中国近世社会史研究及び地域史料論

キーワード：東洋史 中国近世社会 地域史研究 記録伝承 史料論 地方志 碑文 国際学术交流

## 1. 研究開始当初の背景

中国近世社会像を初めて具体的に呈示した内藤湖南は、その著作『支那論』等の中で、宋代以降の中国社会の特徴として、皇帝による君主独裁体制の発達という点を指摘したが、一方では、地方文化の確立・発展という点にも言及していた。しかしその後、かかる近世観をより発展的に継承した宮崎市定は、宋代以降の国制に関わる研究を飛躍的に進展させ、近世期を中央集権的文人官僚支配の時代として捉える傾向を強めた。後の研究者に与えたその影響は大きく、地方や地域を論題に冠した研究であっても、殆どが儒教の素養を備えた文人官僚や文人官僚候補生とも言える知識人の視点からのみ考察されることが多かった。そのため、文人官僚や知識人が記した地方志等の叙述は、どれも似たり寄ったりで、撰者の意図の表れにすぎず、それらを活用して描きうる中華帝国の地方・地域像は、所謂「金太郎飴」のように、どこでも同じ性質や実態しか抽出できないとまで言われ、かかる既成概念が、長らく「迷信」の如く信じられてきたのである。我が国唯一の地方志に関する史料論的著作を含む、青山定雄の名著『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』の中でさえ、地方志は地方官が治政の参考に供するため、あるいは自らの治績を記すために編纂したのであり、「中央集権的官僚統治の進展によって南宋時代に地方志が盛行した」と指摘しているほどである。

またもう一つの潮流としては、斯波義信らに代表される社会経済史の視点から、中国近世社会像を捉えたものもある。確かに都市論や開発論、産業論にしろ、一定エリアの社会の実像を詳細に明らかにし得た点は大いに評価に値するが、依然としてその社会の実像が、如何なる現地の文化的裏付けのもとに長期的に形成されてきたのかという、一定エリア独自の社会文化史的背景にまでには考察が及んでいない。なお、ある一地域の宗族に着目した研究も多数あるが、何れも一族永続のための装置に着目したものが多く、族内の共有施設の機能や有力な官僚を輩出した一族との婚姻関係、科挙及第者輩出のための戦略、中央権力との関係などの解明に終始し、地縁的關係やその宗族が拠点とした地域の独自性を明確に抽出するには至っていない。

一方国外に目を向けると、1980年代以降の米国では、ロバート=ハイムズやピーター=ボルらを代表とする所謂「ローカル・エリート」に関する研究が急速に盛んとなり、その傾向は着実に、後述する本研究の研究協力者等にも受け継がれている。しかしあくまでも「エリート」に着目した地域史研究であり、地方と中央権力との連関性や文人官僚支配の視点を重視したものであるという点は、矢張り否めない。

従って以上のような学術的背景があるためか、現行の高等学校の「世界史」の教科書を複数見ると、宋代以降に関わる叙述は、何

れも皇帝による集権政治、文治主義、江南の開発や都市経済・商工業の発展といった記述に終始している。勿論それらは、中国近世社会像の一面を示すものであるが、地域性を殆ど考慮せずに、地方の社会文化史的独自の展開に関する叙述を含んでいないのは、真の社会の全体像を示したものとは言いがたい。本研究は、そこに革新を起こし、中国近世社会像の再構築を目指さんとするために、地域史研究の視点から計画されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、君主独裁体制や中央集権的文人官僚支配の視点から捉えられる傾向が強かった中国近世期の社会像を、宋～清の地方志及び碑文に見出せる長期的に伝承された記録の分析を通じて、地域史研究の視点から、社会文化史的側面に注目して再構築することにある。しかし限られた研究期間の中で、広大な領域を有した中華帝国の全地域について分析することは不可能なので、研究対象を浙江・福建の東南沿海地域に限定し、次の(1)～(5)の5つの視点からアプローチを試みる。

(1)未着手である、浙江の嘉興、台州、温州、及び福建の福州、興化、泉州、漳州における宋～清に編纂された州県レベルの地方志について、行政区画ごとに悉皆調査を行い、系統的整理を行う。また序文や清朝考証学者が著した後序、跋文を、訳注稿が作成できる程度に精読・解析し、個々の地方志の史料的性質を生成論的に解明する。

(2)残存する地方志に見える叙述の内、繰り返し編集されていく中で、長期に亘って伝承された記録を抽出・分析し、各地方の社会文化史的独自性を探る。

(3)各地方で長期に亘って伝承された記録の史料源に迫るために、各種碑文の悉皆調査を実施し、刻石された叙述と地方志に見える叙述との関連性を明らかにする。

(4)上記(1)(2)(3)の作業を通じ、どの地方に、如何なる記録が、どのような過程を経て、誰によって伝承され続けたのかを明らかにする。

(5)既に完了している蘇州、紹興、寧波における研究成果と、上記(4)の成果とを総合化することにより、中国近世期における東南沿海地域の社会文化史的独自性及び中国及び東アジア海域で果たしてきた当該地域の歴史的かつ現代的意義を解明する。

なお日本の宋代以降の研究では、論題に地方・地域と冠したものが少なくない。とはいえ、中央集権的文人官僚支配の視点からの研究が多く、真の地域史研究と呼べるものがど

れだけあるのか判然としない。また 1980 年代以降は、森正夫が提唱した「地域社会論」の影響もあるため、「地方」と「地域」という両概念が混用される傾向を呈している。かかる現状は、国際的には特異かつ複雑であり、研究内容の理解をめぐって、内外で誤解を生じるに至っている。従って、この研究に関わる研究代表者と海外の研究者とが基礎的な議論を展開し、国際学术交流による中国近世地域史研究のグローバル化を図ることは、大きな意義を有するものと確信する。

### 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者一人によって 4 年次計画で遂行された。当初計画した各年度別の研究方法は、以下の(1)～(4)である。

(1)平成 23 年度：主として研究全体の準備期間にあて、各種地方志の史料性を生成論的に解明すべく、悉皆調査に基づいた系統的分析と序跋文の精読・解析を行う。

浙江の嘉興、台州、温州地区に関する作業を遂行するのに不可欠な、「宋元地方志叢刊」「天一閣蔵明代地方志選刊」「中国地方志集成(浙江府県志輯)」等の基本的設備は、既に受領した「科学研究費補助金」によって、研究代表者の本務校に完備できている。よってそれらを中心に悉皆調査をし、どのような門目・内容によって構成される、如何なる地方志が作成されたのか、あるいは残存しているのかを、府(州)・県レベルごとに分類の上、系統的整理を行う。また、それぞれの地方志の序文等関連史料も検索・蒐集し、精読・解析を実行する。

福建の福州、興化、泉州、漳州地区についても、「宋元地方志叢刊」「天一閣蔵明代地方志選刊」に加え、矢張り「科学研究費補助金」によって整備された「中国地方志集成(福建府県志輯)」を駆使して、上記と同様の作業を実施する。

各種地方志の史料性の解明にあたっては、銭大昕をはじめとした清朝考証学者による研究の成果を無視することができないので、彼等が残した後序や跋文を、各人の文集類などに当たって蒐集・読解し、先学の研究として消化・参照していく。

電子化されたテキストである「中国典籍データベース」等を新規購入し、上記の史料検索作業の効率化を図る。

研究代表者の本務校では閲覧し得ない大型叢書所収等の関連史料や目録類の調査を、東北大学等の主要大学で行い、史料の蒐集・複写をする。

東京で開催される、第 56 回国際東方学会議の中国近世地域史研究に関するシンポジウムで、日本側からの問題提起を依頼されているので、この場で欧米の研究者との議論を深め、中国近世地域史研究に関する国際的な現状と課題を明確に把握する。

(2)平成 24 年度：前年度の成果を踏まえ、各種地方志に長期に亘り記録された叙述の抽出及び解析と、叙述の史料源を碑文の悉皆調査により突きとめる作業を展開し、各地方の記録の伝承過程を探る。

前年度～を継続し、基礎的作業領域での研究を完了させる。

既存の設備図書、新規購入の電子化されたテキスト、主要大学で調査した史料を駆使し、各種地方志に長期に亘り記録された、各地方の叙述の抽出及び解析作業を本格化する。

抽出された記録については、その史料源を碑文の悉皆調査により突きとめ、どの地方に、如何なる記録が、どのような過程を経て、誰によって伝承され続けたのかを明らかにする。

ここまでの基礎的作業領域での個別研究の成果の一部を学会等で公にし、論文化する。

(3)平成 25 年度：前年度の作業の完了を目指すとともに、ここまでの成果を発展させ、各地方の近世期における社会文化史的独自性を探る。

前年度・の作業を継続・完了し、初年度の成果をも踏まえて、浙江・福建に属する各地方の近世期における社会文化史的独自性を探る。

上記の個別の研究成果は、段階的に国内の学会や学術雑誌等で公表していく。

(4)最終年度は、既存の成果に、4 年間にわたる研究成果を加えて研究全体の総合化をはかる。

既存の蘇州、紹興、寧波地区における研究成果と、前年度までの成果とを総合化することにより、中国近世期における東南沿海地域の社会文化史的独自性を解明する。

上記の成果を踏まえて、中国及び東アジア海域で果たしてきた近世期の東南沿海地域の歴史のかつ現代的意義についても検討を加える。

東京で開催が予定される国際会議で、本研究成果を披瀝し、海外の研究者と基礎的議論を展開することで、国際学术交流による中国近世地域史研究のグローバル化を図る

4 年次にわたり行われた本研究の全成果は、報告書を作成して提出する。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

##### 地方志・碑記の系統的史料分類作業の進展

4 年間にわたり、「中国地方志集成(浙江府県志輯)」等の基本的現有設備に加え、「中国地方志集成(上海府県志輯)」などを新規購入し、未着手であった嘉興府や上海市付近の地方志を重点的かつ系統的に調査した。また東北大学においても、各時代に編纂された当該地区の地方志序跋文や関連する清朝考証学者の研究成果の蒐集を行い、読解・訳注稿作成作業に努めた。その成果は、未公表であるが、平成 27 年度中に論文化する目処がつ

ている。

また当該地方の碑記についても、地方志・録文集等から抽出し、拓本の残存状況や、碑記が後世の地方志や録文集にどのように記録されていたのかを探った。最終的に、当該地区を含めた「宋～清の中国東南沿海部における地方志・碑記史料の皆尽調査と系統的分析、史料論的解析に関する研究」の実現に向けた基盤が形成された。

### **地方志・碑記に長期的に記録された伝承の抽出・分析と地域性の解明**

主として寧波府の地方志や碑記に長期的に記録された言説を新規購入した電子テキストなども駆使して抽出し、それら言説の分析を通して当該地区の地域性を社会文化史的視点から解明した。

成果の一例を示しておく。唐代に鄞県の長官として現在の寧波付近に着任した王元暉の事績に注目したが、その事績は、碑文や地方志を作成した後の地方官や当地出身の知識人たちによって千年以上にもわたり記録・伝承されてきたことが判明した。この現象は、土地の人民たちが、王朝の権威を利用することはあったにせよ、かわりゆく王朝支配の動向に関係なく、脈々と王元暉の祭祀を怠りなく継続させ、彼の水利に関わる功績に対する記憶を子々孫々と伝えてきたからに他ならなかった。またこのことは、当地が水利に依存せざるを得ない土地柄であり、その恩恵を特にもたらした王元暉の事績が悠久に記録・記憶され、その恩恵に感謝するための祭祀が長らく継続されてきたことを物語っていた。かかる現象は、長年にわたって水と廟会との密接な関係を水利の特色としてきた、寧波の歴史的な地域性を明らかに反映していた。

### **記録された伝承の性質と新たな地域史研究のための史料源の発見**

地方志や碑文の叙述には、文人官僚の意思を反映したもののみならず、地域の論理を如実に物語るものも含まれていること、地域独自の伝承で長期的に地方志等に記録されたものが、筆記史料にも掲載されていることなどを発見した。特に南宋の洪邁が編集した『夷堅志』には、彼が地方官として赴任した先が主に浙江・福建であったため、任地で伝聞した逸話で、東南沿海地方の地方志・碑文に記録されているものが多く含まれていることに気づいた。従って、各地の地域性の解明には、地方志・碑文に加え、筆記史料をも含めた言説の比較検討こそが極めて効果的であると確信し、次なる研究への発展性を見出せた。

### **国際学術交流による中国近世地域史研究のグローバル化**

本研究の研究期間中に、二度にわたって国際会議に参加し、研究成果を披瀝して討論する機会を持ち得た。これにより、欧米の研究者や中国・台湾の研究者と、それぞれの研究圏における中国近世地域史研究に関する特質や現状・課題に関わる情報を共有できるよ

うになり、当該研究分野のグローバル化が図られた。

また、中国近世地域史研究に関わる英文及び中文論文の翻訳を行い、英語圏及び中国語圏における当該研究の最新成果を日本国内に紹介し得た。

以上のこれら成果は、後掲の5. 主な発表論文等の欄の〔図書〕の・や、『アジア遊学』第181号として刊行された。

なお、本研究期間中に、本研究課題とも密接に関わる研究代表者の単著論文が、中国語に翻訳され、中国の期刊雑誌に紹介された。継続的な国際学術交流の成果は、こうした形でも結実している。

### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で得られた成果が国内外へ与えた最大のインパクトは、次の三点に集約される。

内外で誤解を生じるに至っていた、日本における宋代以降の地域史研究の複雑さや特質、現状と課題を、海外の研究者にも理解してもらえた。特に中国出身で、現在米国の研究者となっている Chen Song (バクネル大学)からは、日本語における「地域」と「広域地方」の間にある区分への関心を引いたという点で、研究代表者への謝辞が寄せられた。

宋代以降の地域史研究が如何なる課題を抱え、どのような可能性があるのかについて積極的な発言をした結果、国内の若手研究者からも反応があり、方法論や関連史料及びその解析方法について学ぶことが多いとのコメントが寄せられた。

南宋・洪邁が編集した『夷堅志』所収の逸話には、中国東南沿海地方の地方志・碑文に長期にわたって記録されているものが含まれることが確認され、筆記史料の地域史研究への有効活用の途が開かれた。この成果は、最終年度中に開催された第59回国際東方学者会議シンポジウムで広く内外に公表され、結果として、2015年6月に台北市で開催される米国アジア研究協会アジア会議ラウンドテーブル「『夷堅志』再考」への討論者としての招請へと結びついた。

### (3) 今後の展望

4年間にわたる本研究期間中には十二分に着手できなかった地域、例えば浙江省内陸部や台州府・温州府、福建省の地方志・碑記・筆記に関する史料論的研究を加えて、将来的に著書のかたちで公刊し、大方からの批判を仰ぎたい。

筆記史料の地域史研究への有効活用への途を拡大して、既存の成果を補完すべく、すでに平成27年度4月より新たに科学研究費補助金による基盤研究(C)(一般)「中国近世東南沿海地域における地方志・碑文・筆記に見出せる記録伝承の社会文化史研究」を進めているので、この研究を通じて本研究の成果を更に発展させる方針である。

引き続き、国際学術交流による中国近世地域史研究のグローバル化を図るために、国際会議への参加や、若手研究者及び英語圏・中国語圏の研究者を視野に入れたパネル等の形成に積極的に努めたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

須江 隆、社会史史料としての『夷堅志』その魅力と宋代社会史研究への新たな試み、アジア遊学、査読無、第181号、2015年、pp.75-90

SUE Takashi, The I-chien chih as Material on Social History: Its Appeal and New Approach to the Study of Sung Social History, TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES, 査読無, vol.59, 2014年, pp.67-68

須江 隆 (劉猛翻訳)、段落缺失の啓示：朱長文及北宋地方志の編纂、歴史地理(上海人民出版社)、査読有、第30輯、2014年、頁数未詳

須江 隆、日本の宋代「地域」史研究が具有する「足枷」視点と史料の問題、中国宋代の地域像 比較史からみた専制国家と地域 (岩田書院)、査読有、2013年、pp.31-54

須江 隆、刻石された地域の言説 寧波の民間信仰の世界を探る、中国宋代の地域像 比較史からみた専制国家と地域 (岩田書院)、査読有、2013年、pp.279-309

須江 隆、高津 孝、平田茂樹、早坂俊廣、「文化都市 寧波」という視点、文化都市 寧波(東京大学出版会)、査読有、2013年、pp.1-18

須江 隆、語り継がれる記憶と寧波の地方志、文化都市 寧波(東京大学出版会)、査読有、2013年、pp.79-98

須江 隆、中国近世地域史研究試論—唐鄞県令王元暉事績伝承の事例を中心に—、集刊東洋学、査読無、第108号、2013年、pp.125

須江 隆、寧波方志所載言説攷—寧波の地域性と歴史性を探る—碑と地方志のアーカイブズを探る(汲古書院)、査読有、2012年、pp.101-125

須江 隆、ジョセフ・デニス「紹興府の地方志の歴史的価値」、碑と地方志のアーカイブズを探る(汲古書院)、査読有、2012年、pp.127-144

SUE Takashi, Obstacles to the Study of Song Regional History: Can Regional Characteristics Be Extracted from Local Gazetteers and Stone Inscriptions?, TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF

EASTERN STUDIES, 査読無, vol.56, 2012年, pp.104-105

須江 隆、『清明上河図』の時代における信心の世界、『清明上河図』と徽宗の時代(勉誠出版)、査読有、2012年、pp.178-186

須江 隆、中国宋代「地域」史研究が具有する「足枷」—地方志・石刻史料は地域性を抽出できるのか—、第56回国際東方学者会議シンポジウム「中国宋代における「地域」像—中央集権的文臣官僚支配国家下における「地域」史研究—」予稿集(私家版)、査読無、2011年、pp.15-27

[学会発表](計5件)

須江 隆、社会史史料としての『夷堅志』—その魅力と宋代社会史研究への新たな試み—、第59回国際東方学者会議(東京会議)シンポジウム「洪邁『夷堅志』の世界」、2014年5月24日、日本教育会館(東京都千代田区)

須江 隆、小二田章氏の報告「『咸淳臨安志』の位置—地方志制作を視座として—」に対するコメント、中国社会文化学会2012年度大会、2012年7月7日、東京大学(東京都文京区)

須江 隆、梅村尚樹氏の報告「宋代先賢祭祀の理論」に対するコメント、中国社会文化学会2012年度大会、2012年7月7日、東京大学(東京都文京区)

須江 隆、中国近世地域史研究試論—唐鄞県令王元暉事績伝承の事例を中心に—、第61回東北中国学会大会、2012年5月26日、東北大学(宮城県仙台市)

須江 隆、中国宋代「地域」史研究が具有する「足枷」—地方志・石刻史料は地域性を抽出できるのか—、第56回国際東方学者会議(東京会議)シンポジウム「中国宋代における「地域」像—中央集権の官僚支配国家下における「地域」史研究—」、2011年5月20日、日本教育会館(東京都千代田区)

[図書](計3件)

須江 隆 他、岩田書院、中国宋代の地域像—比較史からみた専制国家と地域—、2013年、全412頁(pp.31-54, pp.279-309)

須江 隆 他、東京大学出版会、文化都市 寧波[東アジア海域に漕ぎ出す第2巻]、2013年、全282頁(pp.1-18, pp.79-98)

須江 隆 他、汲古書院、碑と地方志のアーカイブズを探る[東アジア海域叢書6]、2012年、全460頁(pp.i-xviii, pp.101-125, pp.127-143, p.301, pp.437-440)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

須江 隆 (SUE, Takashi)

日本大学・生物資源科学部・教授  
研究者番号：90297797